

## キリスト教と英米文学(二)

——永遠の否定から永遠の肯定へ——カーライルの精神の神髄

森 谷 峰 雄

### 内 容

- 一、はじめに
  - (一) カーライル概観
  - (二) カーライルとの出会い
- 二、『衣裳哲学』の成立
- 三、カーライル精神の神髄
  - (一) 永遠の否定 (The Everlasting No)
  - (二) 無頓着の中心 (The Center of Indifference)
  - (三) 永遠の肯定 (The Everlasting Yea)
  - (四) 幸福と祝福
- 四、結 論
 

(今回、三の(三)と四は続篇にゆずることにした。)

### 一、はじめに

#### (一) カーライル概観

去年(一九八一年)はカーライル没後百年であった。『英語青年』(第百二十七号、第八号)はカーライルの特集を行ったのでこの雑誌の寄稿者のエッセイをも参考し得たことは偶然とはいえ、善きにつけ

(彼らが彼を認めた点において)、悪しきにつけ(彼らが彼を誤解した点において)幸いであった。

カーライルほど人と時によってその評価、人氣が極端に異なる人物はない。一昔前にもなるが、筆者がまだ学生の頃、当時の担任の教官であったT助教授に大塚の大学の構内で、立ち話をしながら、筆者が彼にカーライルを読むと言ったところ、「あんな文体の奇異な人の作品は止めておけ」と告げられたことを今なお印象に残っている。このようなカーライル観は日本の英文学界の代表的なものであっただろう。菊地教授も「日本英文学界におけるカーライルの食わず嫌いも久しい<sup>(1)</sup>」と嘆慨しておられる。昭和十三年の時ですら工藤好美教授はその著『カーライル』(研究社版)で「現代の若い読書家たちは、カーライルの名前を遠い古典としてのみ承知して、実際に彼の著作を読むということは非常に稀になったのではなからうか<sup>(2)</sup>」と書いておられる。

それでは大正時代はどうかというと、確かに石田憲次とか土居光知とかの心を捕えたが、これらの学者の思想を形成するだけの力は持たなかった、と言われている<sup>(3)</sup>。結局、カーライルは日本では明治の人たち

にだけ強い思想的影響を与えなかったのであろうか。これにはカーライルが民主主義を認めず、ファシズムに近く、危険があったこと<sup>(4)</sup>又、それ以前にJ・A・フルードの『回想録』・『カーライル伝』などがカーライルの評価を傷つけてしまったことによるのも一因があるであらう。

先の、T助教授のカーライル観を後日、同じくキャンパスでI教授に話すと、「それは田舎っぺの言うことだ」と憤慨して立ち去っていく彼の後姿を今でも思い出す。この教授はエマソンの大家で、必然的にカーライルを尊敬していたに違いない。このように、日本にもカーライルの真価を認め、かつ彼を尊敬する人がいることも又真実である。

筆者は特にカーライルを専攻する者ではなく、立ち入って論ずる資格はないが、彼の文体、思想の弁護のために諸家の意見を紹介しよう。

彼の真摯な友人 John Sterling (1806-44) は一八三五年五月二十九日、*Sartor Resartus* について彼に手紙を送っている。その中でスターリングはカーライルの文体、言葉使いが適切でなく野蛮で、特にそのドイツ語式の表現法は固くて奇妙である。そのために読者を疲れさせる、などの欠点を掲げている。<sup>(5)</sup>確かに、彼の文体には彼自身も認める通り、一種の粗野があったとしても、それはむしろ彼の素朴さに通じると考えられる。しかも、彼の文体は彼の精神の飛翔の現われであって、類稀なる天才の閃きから来る旋律であった。これを非難するのは当然な<sup>(7)</sup>。L・カザミアンは、

... his style makes it easy for a mind to pass from one phase to another; and emphasizes the force and the scope of the intellectual activity which comprehends and unifies those planes.<sup>(8)</sup>

としている。現在の人が非難している文体そのものこそ、当時彼に接していた人々には大きな感動を与えたのである。イアン・キャンベルはこれについて次のように述べる、

生存中はその文体の故にかえって賞讃が高かったのである。彼の前に坐って傾聴している人達には時間の立つのが忘れられた。滝の如く流れ出る、又独語の如く響く彼の例話に耳を傾けていたものを、そのまま紙に書くと、まことに豊富な文体となり、例証に例証をかさねて自分の思想を解説する魅力に驚かされた。<sup>(9)</sup>

現在の人にはカーライルに接することが少ない。逆に言えば、今日でも彼の著作に親しんでいる人ならば、カーライル張りという特徴の文体の故にかえって彼の文章に深く感銘を受けるであらう。しかし、これは程度の問題である。彼の *Sartor Resartus* のみに限って親しむ人でもその文体を賞讃する。たとえば、彼の同世代の米人 Nathaniel L. Frothingham (1793-1870) は *Christian Examiner* (September, 1836, xxi, 74-84) に書評を寄せて “It throws out the noblest conceptions as if at play, and its sparkling expressions seem kindled by the irrepressible fervor of a brilliant mind (p.42)” と評す。

いる。「近年の Carlyle 評価」と題して中野好夫氏は、Trevor-Roper という人がカーライルを「知的ナチズムの血統」と叫んだと言ひ、近年のカーライル評価はこの方向に進んでいると推論している。中野氏は「もはや新渡戸博士時代の Carlyle 観は過去のものとなつてしまつたかに見える」と言う。もし、これが事実とすればカーライルが叫んだ道を大きく誤まるものと思う。我々はここでカーライルの眞の姿を見るべきであらう。

彼が本当にファシヨ的であるならば彼を読む必要はない。矢内原忠雄はその信仰に於いて文学研究者以上の鋭い批判精神を持っていた。

彼はカーライルの英雄主義とドイツやイタリで言われている英雄主義が根本的に異なる、前者のそれは神の前に己れの罪を謙遜に悔いる魂の偉大さ、後者のそれは人気とか手腕とか愛国心のそれであつて、前者が最も平等主義、後者がファシヨ的であると述べている。<sup>(11)</sup>

カーライルが戦争を肯定する武力行使、ファシズムを主張すると誤解されているがキャンベルはそれを次のように分析している。<sup>(12)</sup>『英雄と英雄崇拜』の次の文章、「おおむね事物は、自らに即して己を繁殖させるものである。……劍にせよ、舌にせよ、持っている、或いは手に入られるどんな道具を使つてもよい、この世にあって自らのために戦わしめる。説教でもより、パンフレットでもよい、戦え、最善をつくして奮闘せよ。」を見ると、確かに彼は武力行使を勧奨しているかに見える。しかし、これは人々が考える“*Might is Right*”を主張しているのではない。カーライルが強く訴えているのは「社会は今や病魔におかされている。世を正しくするためには、人生の眞実なるもの

を現実にしなければならぬ」ことである。『過去と現在』では、人類が地獄に向かつて進んでいることを憂ひ、彼らに向きを変えて欲しいと訴えている。英雄はこのような道から人々を眞現の道に、生命の道に連れ戻さんと努力する人のことである。つまり、昔のイスラエルの預言者―エレミヤ、イザヤ等―の働きをする者である。危険なことは人々がこの眞理の人―英雄―を眞理の人として認めることができないことである。何故ならば彼らは神への信仰を失っているからである。

カーライルはその点を主張しているのである。「英国はその英雄を尊ぶの途を学び、また偽英雄、取り巻き屋、ガスだけの歴史的權威を識別することができなければならぬ。さもなければ、わが英国は永久に、代る代る新しく出現する偽せものばかりを拝みつづけ、遂には偽物の太祖 (Father of Quacks) を拝することになる。」(イアンはこの他にも引用しているが省略する。)彼は右の引用がカーライルのファシスト的要素を示すものと見て次にそれに対してその非を説く。

「第一に彼の発言は表面的には支配權と武力のことばかりである。けれどもこれは当時英国に降りかかりつゝあつた悲惨な運命をまぬかれるためには、やむを得ない武力行使であるという彼の鋭い認識を考慮してやらなければならぬ。第二に、武力行使をする者が、権力ある高官の軍人や政治家ではなくて、神の啓示し給うた有能なヒーローであるということである。力の強い者が勝つという意味で、力 (Might) が正 (Right) であると言つのではない。神が選んだ人物が、社会の危機にあたって、彼の力を働かせるために生まれているのだという意味で力が正しいのである」<sup>(13)</sup>。

以上によって、カーライルを最も不人気にした原因の一つである彼の英雄主義<sup>(14)</sup>は、実際は読む側の誤った認識によって正しく把握されなかったと言える。カーライルにその責任があるのではなく、時代の精神にそれが帰されなければならない。中野好夫氏が伝えているような近年のカーライル評価はこの責任を再びカーライルになすりつけているにすぎない。真に、信仰のない研究者・学者の人物評価程危険で誤まるものはない。工藤氏にしても松本啓氏にしてもその例外ではない。両氏ともカーライルの神はキリスト教の神ではないとしている<sup>(15)</sup>。特に日本のカーライル理解者の代表とも見られる人でさえ、彼の根本の魂を知っていないのは何としても残念でしかたがない。

この点、欧米の学者は彼の宗教をも正しく把握している。Thomas Carlyle に於ける Ian Campbell もその一人である。彼が言及するカーライルの宗教を選択して引用する。「アービングの神学に間違いがあると思う点は厳しく指摘して、それを改めるように熱心に説得もした」(多田訳、八一頁)とある。信仰のない人が牧師にその信仰・神学をただすはずがない。「カーライルは多くの場合、教職者を誹り、因習的キリスト教を盲信する人を嘲笑したけれど、スターリングとの交わりは親しかった。カーライルはキリスト教の価値を再評価することを大いに奨励した人である。同時に当時の教会万般に就いて厳しく批評した人でもある」(「三二—三三頁」)。彼は日本で言えば内村鑑三のようで、教会を批判したけれども、自らは燃えるような熱い信仰を抱いていた、と言いうことができる。キャンベルはカーライルのコーリッジ批評をあげている、「彼(コーリッジ)は苦痛と恐怖をお

それることなく、勇敢にこの荒野を突き抜けて、彼岸の新しい信仰の基盤に立つことはできなかった。その不信仰の荒野の中にあって徒らに自己を弁護する論理の蜃気楼を造り上げて自らを慰める途をえらんだ」(一三四頁)。コーリッジの不信仰をこれほどまでに分析できる人が無信仰であることはない。キャンベルはカーライル像を刻んでいる。その一、「人生には強力な宗教感覚が必要であるという考え」を持っていた。その二、「強いカルビン主義の宗教組織の中で育ったので、全てを知り、全てを支配し給う神に対し、個人的報恩の義務があることを生涯忘れなかった」(一八八頁)。その三、「*Charism* や *Past and Present* を書かせた大きな力は、外見だけのクリスチャンが彼らの行動によって、何百万という人間を不幸におとし入れているという事実に対する憤りから生まれたものである」(一九九頁)。キャンベルのあげるカーライル像は明らかに彼がまことの神の下僕であったことを伝えている。何故、このようなカーライルを日本の学者はキリスト者でないと言うのか理解できない。

L・カザミアンは、「He could in no sense be called an orthodox Christian」(*ibid.*, p. 119)と言う。しかし、それはカーライルがキリスト者ではないと言っているのではない。むしろ、「*orthodox Christian*」がまことの信仰から外れがちなことをカーライルもあるいはカザミアンも認めた上での発言である。George Fox を「the very type of religious truth」(*ibid.*, p. 120)としたのは一般のキリスト教会が「the poms of worship」を重んじて、「the ecstasies of soul」を考えないことに注意を向けたからである。カーライルの倫理はキリ

ストの倫理と異ならない。しかしそれはキリスト教の教義の無資格の複製物 (“an unqualified duplication of Christian doctrine,” *ibid.*, p. 119) ではない。彼も時代の子であり、個性を持つ。従って、その信仰の現われ方にも特徴があつて当然であらう。従つてカザンミンは “Reflected by his robust personality, by his instinctive Puritanism, this morality was destined to develop much less in the direction of love than in that of action” (*ibid.*, p. 121) と言ふ。しかし、注意したのは “action” は愛の源である彼の信仰から来るもので、社会主義者の人間中心から来るものではないことである。この問題をもう少しカーライル自身の書を物ごつと触れてみた。このため Edward Flügel, *Thomas Carlyle's Moral and Religious Development*, translated by Jessica Gilbert Tyler (Haskell House Publishers, 1971) の説を引用する (従つてカーライルの文章の著書から来るものでない、原典ごとの話ごつと)。

*Characteristics* に於てカーライルはキリスト教会を批判してゐる。

The most enthusiastic Evangelicals do not preach a gospel, but keep describing how it should and might be preached.... Considered as a whole, the Christian Religion of late years has been continually dissipating itself into Metaphysics; and threatens now to disappear, as some rivers do in deserts of barren sand. (*ibid.*, p. 45)

彼はキリストの精神を以てキリスト教界に注意している。フリーゲルは “Carlyle's religious feeling became completely imbued with the teaching and character of Christ” (*ibid.*, p. 46) と述べてゐる。唯、キリスト教には “negative pole” と “positive pole” があり、カーライルはカント、ヘンクス、クロムウエルと同じく前者に傾向してゐた。即ち、彼には憐れみとか愛の觀念が乏しかつたことはフリーゲルも認めている。しかし彼が “ascetic-pessimistic aspect of Christianity” に片寄つてゐたとしても、彼に人への愛がなかつたのではない。それは *Past and Present* に

Thou art the latest Birth of Nature; it is the Inspiration of the Almighty that giveth thee understanding! My Brother, my brother! (*ibid.*, p. 62)

と叫んでゐるところから分かる。彼がキリスト信仰者であつたことは彼の聖書觀でも明らかである。フリーゲルは “Like Goethe, he remained true to the Bible during his whole life” (*ibid.*, p. 65) と述べる。聖書はカーライルにとつては光の源であつた。Sartor Resartus で彼は聖書を神の手によつて書かれたのを見たと言つてゐる (“with my own eyes I saw the God's Hand writing it,” *ibid.*, p. 66)。これ程の聖書觀を示し、日常生活に祈りを欠かなかつた者をキリスト者でないと誰が言えようか。彼自らも、

I am neither Pagan nor Turk, nor circumcised Jew, but an  
unfortunate Christian individual resident at Chelsea in this  
year of grace, neither Pantheist, nor Pottheist... (*ibid.*, p. 69)

と友人スタージングは訴えている。

本論は彼の精神の本質を探ることにある。前川氏は「カーライルが死んで一〇〇年、折から世界にきな臭い風がそよぎはじめている昨今、今さら彼の私生活の些事に驚く必要のないぼくたちは、カーライルの思想の『英雄観』を正しく評価し、歴史に位置づけることは明らかにぼくたちの責任であろう」と述べている。真に然りであるが、彼の英雄観を知る前に彼の魂を知らなければならない。工藤氏も「彼の最も弱いとされた面——（この原因・責任は読者の側にある——筆者）——においてさえ……再考される価値がある」と言っておられる。<sup>(15)</sup>

## (二) カーライルとの出会い

次に筆者とカーライルの出会いを語ろう。彼は大学一年の春休みとその年の夏休みとでカーライルの『衣裳哲学』（土居光知解説、註解、研究社小英文学叢書）を読了した。何故にカーライルに興味を持ったかと言うと、その頃彼は内村鑑三に傾倒し、その著『宗教と文学』の「カーライルを学ぶ利とその害」（著作全集五巻）を読んだからである。彼の友人新渡戸稲三はこの書物を三二回以上も繰り返し読んだと矢内原忠雄は語っている。<sup>(16)</sup> かく申し筆者もかなりカーライルの悪影響も受けたのではなかったのか、「彼が大学の提供するものを大胆に拒

否したり、大学教育の一環をなす学生生活や、教師との人間関係に關して個人的反感を示し、自己を遠ざけたことは誤りであった」と批評されている。<sup>(17)</sup>

この研究社英文学叢書『衣裳哲学』を今手にすると、これを読んでいた当時の彼の最も平和で幸福な生活を今なつかしく思い出す。それは丁度カーライルが一八二五—一八二六の間、ホッダム・ヒルで過ごした生活に類似する。イヤンから引用しよう、「カーライルはその間（一八二五—一八二六年）一年ばかりを郷里エクルフィカンに近く、より高い高原地のホッダム・ヒルに在る農場で、生涯を通じての最も愉しかったと思う月日を過ごした。此処からは遠くスコットランドの南部一帯、素晴らしい眺望がたのしまれた。父ジェームズは近くの農場で働いていたが、母は大好きなこの息子と一緒に住んでいたで、家庭は二つに分かれ両方の農場を経営していた」<sup>(18)</sup>。筆者の父・母も健在で彼が故郷の家に帰って感じるその零囲気、丁度春休みのこととて、田舎の三月は本当に復活を覚えさせる暖かい自然の陽気であった。彼は当時、正にホッダム・ヒルに於けるカーライルのように魂の新生を得て聖霊を感じ、万物に喜びを得ていた。当時は彼の生涯に於いて幸せの頂点であったと思う。その後の不幸を思っ、その思いが切実に感じられる。

さて、この『衣裳哲学』は非常に難解な英文であったが、その内容が伝える魅力にひかれて P O D、A C D（当時 C O D は持たなかった）をひきながら（時に居眠りしながら）読んでいった。（読み終わったのは一九六五年八月二三日であった。）今、その時から一六年も過

きているが印象に残っているのは、「田園生活篇」で作者が幼い時、天気の良い夕べに夕食を外に持ち出して食べたという絵のように美しい光景である。

その部分を引用する、

「晴れた夕べなどに、私は夕食（ミルクで煮たパンクズ）を持ち出し、戸外でそれを食べる習わしであった。果樹園の壁の冠石の上に――よじ登れば届くことができた、もし父アンドレアスがせん定用のはしごを立ててくれれば大変楽に――かゆ碗を置いた。そこで遠い西の山に沈んでいく太陽を見ながらおいしく夕食を食べた」<sup>(21)</sup>。

このような光景は万人に共鳴を与えると見え、工藤好美氏もその著『カーライル』の中でこの部分を引用し、それを「豊かな美しい瞬間」<sup>(22)</sup>と称している。

勿論、この書物の最も重要な部分はこのような田園風景にあるのではない。作者がこの世を否定して新しい肯定に到ったことが最も重要である。永遠の否定から永遠の肯定に到る過程は筆者の魂の成長の過程と同じである。<sup>(23)</sup>「ゲーテは時代に代り」と工藤氏は言う、「カーライルに先立って、『永却否定』から『永却肯定』に出る道を示した人である。彼の微笑むがごとく平静の下には激しい苦悩と休むことなき自己教養の長い歴史が隠されている」<sup>(24)</sup>と。ゲーテに心酔したカーライルが彼の思想の影響を受けないはずはない。「永遠の否定」はゲーテのファウストから来ている。悪魔がファウストの前に立って、「I am the spirit that ever denies」（Ich bin der Geist, der stets verneint!）

と言った。常に否定するから“Everlasting No”という言葉が生まれた。「サタンというのは何でもけちをつけてまわり、片端から否定してまわる」のである。<sup>(25)</sup>かかる人物は多い。神は肯定し悪魔は永久に否定する（“It was God that said Yes. It is the Devil that forever says No.”—Froude）。彼はこのサタンの否定から神の肯定へと到達した。

筆者はカーライルに教えられてこのような過程を辿ったのではない。パウロ師のローマ人への手紙、それを注解した内村鑑三の『ロマ書の研究』によって自由―罪からの解放―を得たのである。ルターの「キリスト者の自由」もこの自由を言っているのである。

この自由という実体を知らない者がカーライルの『衣裳哲学』に興味を持つのは困難であろう。筆者はこれを大学の英文学演習のテキストとして用いたが、学生の反応は芳しくない――しかし、彼らが大学を卒業し、実社会に於いてはじめてカーライルから学んだことは役に立つのだが――。彼らの興味は多くの場合、恋愛物に限られ――それにはそれなりの意義はあると筆者も思う――人生を真面目に生きようとする姿勢に欠ける。人生の意義を真摯に求めようとする者はいつの世にも少数者であるのか。そうはあっても、又、たとえ今後カーライル人口が増えたとしても、「本当にカーライルの意味をどれくらい了解するようになって来」<sup>(26)</sup>るかは「疑問である。しかし、世の中の人間はそうであるとして、我々はもう一度カーライルを読んでみる価値はあるでしょう」と矢内原忠雄はカーライル研究の意義を説いている。

注

- (1) 『英語青年』第二二七巻第八号、三六頁。
- (2) 工藤好美『カーライル』（研究社英米文学評伝叢書復刻版、昭和五六年）、序。
- (3) 工藤好美「カーライルと日本」『英語青年』第二二七巻第八号、十三頁。
- (4) 同。
- (5) 前川祐一「カーライル思想のゆくえ」『英語青年』第二二七巻第八号、九—十二頁参照。
- (6) Cf. "John Sterling, Letters to Carlyle," Jules Poul Siegel ed. *Thomas Carlyle; The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), pp. 26—33.
- (7) 工藤氏『カーライル』、八三—八四、一四六—一四七頁。
- (8) Louis Cazamian, *Carlyle*, translated by E. K. Brown (Archon Books, 1966), p. 133.
- (9) イアン・キャンベル著多田貞三訳『トマス・カーライル』（成美堂昭和56年）、「一七五—一八一頁から、取捨選択して引用した。」
- (10) 中野好夫「近年のカーライル評価」『英語青年』第二二七巻第八号、四四頁。
- (11) 矢内原忠雄『土曜学校講義』四（みすず書房、一九七二年）、一八〇—一八一頁参照。
- (12) イアン・キャンベル前掲書、一七六—一七七頁から取捨選択して引用した。但し、この中に筆者自身の言葉も加えてる。
- (13) 同、一七八頁から引用。
- (14) この英雄観は *Sartor Resartus* の源を覗く。"For him the personal contact of the soul with God is the indispensable sufficient essence of religious life. His sympathy is always with the mystics: and in his eyes heroism itself, the source of all great actions derive from spiritual contact with the transcendent energy." (L. Cazamian, *op. cit.*, p. 120)
- (15) 工藤「カーライルと日本」、十二頁、松本啓「伝記作家としてのカーライル」『英語青年』第二二七巻第八号、十四頁参照。特に後者の説「……トイフェルスドレックの『神』がかならずしもキリスト教ではないところに問題の複雑さがある。カーライルの神がキリスト教の神そのものでないことはこの書（『衣裳哲学』—筆者注—）を読み進めるにつれて明らかになること」（十四頁）としている。神は個人に啓示されると固定的ではなくなる。カーライルの神は実在の神である。筆者は松本氏が本当に右のように考えているのか疑わしく思える。前者については「我々人間は自然を通してのみ神を認めることができる」（同、『カーライル』六頁）と云える程の人に本当にキリスト教で言う神が認識されているのか疑わしい。
- (16) 前川氏、前掲書、十一頁。
- (17) 工藤氏「カーライルと日本」、十三頁。
- (18) 矢内原忠雄、前掲書、一八三頁。
- (19) イアン・キャンベル著・多田貞三訳『トマス・カーライル』（成美堂昭和五六年）、「三〇—三二頁。」
- (20) 同、五六頁。
- (21) 原文は次の通り。"On fine evenings I was wont to carry forth my supper (bread-crumbs boiled in milk), and eat it out-of-doors. On the coping of the Orchard-wall, which I could reach by climbing, or still more easily if Father Andreas would set-up the pruning-ladder, my paringer was placed: there, many a sunset, have I, looking at the distant western Mountains, consumed, not without relish, my evening meal." (Thomas Carlyle, *Sartor Resartus, On Heroes and Hero Worship* (Everyman's Library, 1973, p. 70)°
- (21) 工藤好美『カーライル』、一八頁。
- (22) 英文学者が著したこの種の著書として石田憲次著『二度生まれる—文学に現われた宗教的回心』（京都あぼろん社、一九八一年十月）がある。



る。この書は又筆者の精神をも現わしている。

(23) 工藤好美『カーライル』、五六頁。

(24) 矢内原、前掲書、二二〇頁。

(25) 同、一八一頁。

## 二、衣裳哲学の成立

一八二六年一〇月一七日、トマス・カーライルは六年越しの交際の末、愛する Jane Welsh と彼女の故郷で結婚し、エディンバラ郊外、Comely Bank にウェルシュ夫人が二人のために用意したアパートに一八二八年春までの二年間住んだ。当時彼は『エデンバラ・レビュー』誌の寄稿家として有力視されていたが、一八二六年に出版界は崩壊したため、彼は経済的に不安定となり、大学に職を求めたが二回とも失敗した。経済的な行き詰まりから彼らはジェイン名義の土地クレイゲンパトック (Craigenputtock) に一八二八年春から一八三四年四月春までの六年間住むことになった。このクレイゲンパトックでの二人の生活振りをルイ・カザミアンの『カーライル』から引用しよう。

「クレイゲンパトックでの生活は儉約で孤独にならざるを得ないが、戸外の土地、野の湿原地、変化する空と清い空気がカーライルの心に訴えた。クレイゲンパトックで彼はもう一度、自分が成長したのと同じ種類の地に来た。彼の両親もまた生活していたアナンデールは直ぐ近かったし、ウェルシュ夫人が引居したテンブランドも遠く離れていなかった。この辺境の地で、最も近い村

から五マイルも離れていて、カーライルの集中を乱すものはない。彼には恐れるべき退屈もなく、彼の痛む神経もこの沈黙の中で甘美な軽減を得た。彼は努力をしないでこの新しい環境に適合した。彼はそれが今や、瞑想の傑作を準備しようと自らに引き入れようとしていた天才の緊要な要求と恵まれた調和にあると感じた。長い仕事の後の朝や夕、丘や小溪谷を越えての日毎の散歩、小川や暗い沼地の縁を遠っての乗馬——こういったものすべては正に彼の生命的な本能が要求したものであった。彼は今や内面にぼんやりと発酵しつつあった本を書くことが出来た」。

「カーライルの精神が円熟した時から、」とルイ・カザミアンは言う、「彼は自分を十分に表わす本を書く願望に悩まされていた」と。カザミアンの研究等に従って、この『衣裳哲学』の生い立ちを紹介しよう。

一八三〇年四月の *Journal* に “I have now almost done with the Germans.... After all, one needs an intellectual scheme (or ground plan of the universe) drawn with one's own instruments” と書いている。同年八月、母親にあてて “I could write, and will write, something infinitely better ere long” と手紙を書く。同じ頃ゲーテに “I see not well what is to come of it all, and only conjecture from the violence of the fermentation that something strange may come” と手紙を書いている。続いて、十月一九日弟の医者カーライルに “what I am writing at is the strangest of all things: begun

as an Article for *Fraser*; then found to be too long except it were divided into two.” “...now sometimes looking almost as if it will swell into a Book”と書いてゐる。十一月の論文を本でなく二つの論文にすることに決めたが、彼はこれを悔いた。彼はフレイザー社にその原稿を送ったが、フレイザーの出版が遅れたのでその論文を取り戻したと一八三一年一月二日に弟に伝えている。この本を論文にすべく、六ヶ月を要してそれに取り組んだ。<sup>(2)</sup>この仕事は一八三一年七月に完成した。七月十二日彼は弟に手紙を書いてゐる。“I am struggling forward with Dreck, sick enough, but not in bad heart. I think the word will nowise be enraptured with this (medicinal) *Devil's Dung*; that the critical republic will cackle vituperatively or perhaps maintain total silence: *a la bonne heure*! It was best I had in me; what God had given me what the Devil shall not take away”<sup>(3)</sup>と。八月四日、出版社を探しにロンドンへ行くが見つからなかった。「カーライルが『サーター』を出版する物語が語り草になっている。一八三三年原稿を『フレイザー』に戻す。彼が『サーター』を書いた目的は定期雑誌から逃れることだったが、エマソンが一八三六年アメリカで、イギリスでは一八三八年彼が『サーター』を出版するまで成功しなかった。一八三一年と『サーター』が『フレイザー』に載せられた一八三三年の間にカーライルはこの本を世界が必要としているのをますます強く感じた。しかし、出版社は次から次へとこの本を出すのを拒絶した。一八三三年五月一七日、彼は弟ジョンに手紙を書く“*My chief project for the summer is to cut*

*Teufelsdröck into slips, and have it printed in Fraser's Magazine*: I have not proposed it to him yet, and must go warily to work in that, for I have spoilt things already by want of diplomacy”<sup>(4)</sup>と。原稿はふり出しに戻った。彼はフレイザーに『サーター』について語った“*My own conjecture is that Teufelsdröck, whenever published, will astonish most that read it, be wholly understood by very few; but to the astonishment of some will add touches of (almost the deepest) spiritual interest, with others quite the opposite feeling*”<sup>(5)</sup>『サーター』は一八三三年十一月から一八三四年の八月にかけて(一月と五月を除く)『フレイザー』に載せられたが、けなされた。この種の本はシリーズには向かなかったのである。読者に全体として読まれなかった。エマソンでさえ、最初の四分冊を読んだ時これに反対したが全部読んでからは先の反対を取り消し、かえって定期雑誌の不人気に失望するなど言ったほどである。

筆者は『衣裳哲学』の全てに興味があるのではない。その中の中心思想である彼の回心を扱った「永遠の否定」から「永遠の肯定」への彼の霊的過程に興味を持つ。初期の批評家 Alexander Hill Everett (1790-1847) はこれらの三篇を“*kernal of work*”<sup>(6)</sup>と言った。以下これらの三篇に重点を置いて論述する。

# 注

- (1) Louis Cazanian, *op. cit.*, p. 77.
- (2) 以上は右のカザニアンの著書八三—八五頁、一〇〇—一〇二頁を自由  
に訳し、他にキャンベルとW・H・ハドソン篇のものを参考にした記

述べる。

- (3) Gery H. Brookes, *The Rhetorical Form of Carlyle's Sartor Resartus* (University of California Press, 1972), pp. 27-28
- (4) *Ibid.*, p. 34.
- (5) *Ibid.*, p. 36.
- (6) “‘Everlasting No’, the ‘Centre of Indifference’, and the ‘Everlasting Yea’ ... may be said to constitute the kernel of the work.” (Alexander Hill Everett, from an unsigned review, *North American Review*, *Thomas Carlyle; The Critical Heritage* ed. by Jules Paul Seigel (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), P. 38).

### 三、カーライル精神の神髄

#### (一) 永遠の否定 (The Everlasting No)

##### 〔内容〕

希望と信仰の喪失、損得哲学。トイフェルスドレック氏は暗黒と絶望の中にあっても依然として真理にしがみつき義務に従う。表現できない苦痛と不信仰の恐怖。熱狂的な危機。永遠の否定に対する反抗。バフォメの火の洗礼。これが作者によるこの章の内容である。

彼の環境がおぼろげであっても、彼の霊的自然は進歩し成長していたのである。この時代は危機・転移の時代であった。狂気じみた発酵の時期であった。それが強烈であればそれだけ明確な結果が得られるものであろう。作者は次のように書いている。

Such transitions are ever full of pain; thus the Eagle when

he moults is sickly; and, to attain his new beak, must harshly dash-off the old one upon rocks.<sup>(1)</sup>

(そのような転移は常に苦痛で一杯である。かくして羽毛が抜け変わる時の鷲は病弱である。そして新しいくちばしを得るために、荒々しい古いくちばしを岩の上で打ち砕かなくてはならない。)

現代人の多くはこのような脳みの時期を持たないで青春を過ぎしてしまふ。あるいは脳みを持っててもそれを深刻に受け取めず、そこから、人生の深い意味を見い出す糸口すらも見つけることが出来ないでいる。トイフェルスドレック氏は青春の心が望み、祈り求めるものすべてが拒否されてしまった、否、尚悪いことに、与えられたが、ひたすら取られたのである。これを人はロマンティズムの自己矛盾と解することができ<sup>(2)</sup>る。人には希望がなくては生きていけない。「人は、正しく言えば、希望に基づいている。彼には希望しか所有物はないのだ。人の世は強調して言えば『希望の場』である」(“Man is, properly speaking, based upon Hope, he has no other possession but Hope; world of his emphatically, the ‘Place of Hope.’.”)<sup>(3)</sup>氏は目下のところ、希望からは全く閉ざされている。黄金の希望の光ではなく、地震と嵐をはらんだうす暗い銅色の天空をぼんやりと見渡す。彼の場合、失望は我々が考えるより深い意味があった。職業も得ない、恋する女性に裏切られたという現世的な失望だけではなかった。以前は敬虔な母親から教えられて宗教心に厚かった彼は今や全く無宗教的

彼は自分が受けた大学教育を非難している。大学の学問によって彼は信仰を失ったのである。キャンベルはカーライルが数学者レスリーの下で精神的な回心―恐らくこれは精神的变化と称すべきものである―を経験したことを言っている。「レスリーの教える数学は彼に強烈な興味をいだかせた。この時カーライルは精神的回心を経験したものと見てもいい。彼が *Sartor Resartus* の中で書いた灯熱の街頭での回心よりも遙か以前のことである。それはエディンバラ大学の薄暗い数学教室の中で起ったのであった<sup>(4)</sup>」と。この結果彼に生じたのは学問的傲慢であった。つまり、知識が信仰を失なせたのである。キャンベルは続けて、「この新認識の興奮がこれまで持っていた興味や先入観を捨てさせたのは当然のこと、この時以来、彼の少年期を支配していた極めて健康な父母の宗教信仰が、どうやら彼の日常生活を動かす力を失い始めた<sup>(5)</sup>。」と述べる。ミルトンのイヴがサタンに誘惑されたのもこの知識であった。

宗教心、信仰は人間存在の根底に存し、その人の魂、霊的生命である。それを失うことは人生を根本から崩すことになる。<sup>(6)</sup>人間の幸福にとって信仰は必須のものである。殉教者はそうでなくば弱いのであるが、信仰があれば朗らかに恥と十字架を忍ぶことができる。純粹に道徳的な天性を有する者にとって、宗教的信仰の喪失は万物の喪失に等しい。篇者はトイフェルスドレック氏に同情して言う、

Unhappy young man ! All wounds, the crush of long  
continued Destitution, the stab of false Friendship and of

キリスト教と英米文学(二)

false Love, all wounds in thy so genial heart, would have  
healed again, had not its life-warmth been withdrawn.<sup>(7)</sup>

(不幸な若者よ！ あらゆる傷、長く続いた窮乏、偽りの友情と偽りの恋の突き傷、汝のかくも温和な心の中のあらゆる傷は、もしその生命の温かさがひっこめられなかったら、再びいえたであろうに。)

この世の精神と純真な魂は相容れない。この世は自らの罪を隠すために、心の温和な者を非難し、中傷する。このようにして、この世の勢力はその力を保っていく。真にこの世は悪魔の世である。この事実を本当に認識できる者はその仲間ではない。若者は長い間貧しく過ごし、偽りの友人に売られ、偽りの恋人に侮蔑され、深手を負った。友人達は、恋人は自分を踏み倒してどんどんこの世に受け入れられて今を盛りに振舞っている。この矛盾、本当に正しい者がけちらされ、偽り者が時を得る世の中。一体、人生の目的は何か。かかる認識こそはヘブライズムの特質であって、彼がその影響を受けたゲーテのヘレニズムと対照的である。<sup>(8)</sup>イエスの言葉が思い出される「あなたがたは、何を見に荒野に出てきたのか。風に揺らぐ葦であるか。では、何を見に出てきたのか。柔らかな着物をまとった人か。きらびやかに着かざって、ぜいたくに暮している人々なら、宮殿にいる。では何を見に出てきたのか。預言者か。そうだ、あなたがたに言うが、預言者以上の者である」(ルカ伝七の二四―二六)。

柔らかな着物をまとうことが人生の目的ではない。人生の目的は欲望、快楽や野心を満足させることではない。真の自我に到ることである。氏は預言者の仲間に入らんとしているのであろう。

彼は叫ぶ、神はいないのか、神は最初の安息日以来、宇宙の外側で事の成り行きを見ているだけなのかと。解放されない縛られたプロメテウスのような人間にとって、自分に徳があると気付いていて、苦難だけではなく不義の犠牲者であると感ずるのは惨さを最もひどくすることである。徳という各の英雄的な靈感は何らかの情熱に過ぎないのか。血液の煮えたぎり、他人が利益を得る方向での煮えたぎであるのか。トイフェルスドレック氏の苦悩は続く。この苦悩で次のように確信する、

only this I knew. If what thou namest Happiness be our  
true aim, then are we all astray. <sup>(9)</sup>

(唯このことを私は知る、もし汝が幸福と名付けるものが我らの真の目的であるならば、それなら、我らは皆、さ迷うということ  
を)

自分は人一倍努力をし、道徳にも信仰にも厚く、情深くあっても、他人はふしだらで、自分の築いた道徳を利用して益し、この世に名誉・地位を得ている、然るに自分は世から恥を受け、不名誉を着せら

れ、この世に孤独に投げ出され誰も援助するどころか、理解、同情すらせず、かえってその善き分をもかえって悪く取る。この矛盾にあって、欠点もあらうが気高くて純真な魂が苦しんでいる。それなら、いっそのこと自分もこの世の人となって、悪魔の手に陥ろうか。肝臓の病気に較べたら良心の恐れなど無に等しい。道徳にはなく料理法に我らのとりでを築こう。そこでフライパンをみがき、悪魔に甘美な香を供え、悪魔がその選んだ者のために与えた旨いもので気楽に暮そう！ このように氏は思い悩む。しかし、一度神の浄土に入った者はこの世に沈むことはない。いかに、苦悩・懷疑・不幸・恥辱にさいなまれても、真理を忘れるような氏ではない。彼は言う、

I nevertheless still loved Truth, and would bate no jot of my  
allegiance to her. "Truth!" I cried, "though the Heavens  
crush me for following her: no Falsehood! though a whole  
celestial Lubberland were the price of Apostasy. <sup>(10)</sup>

(私はそれでも尚、真理を愛した、そして真理への忠誠の一点たりとも減じはしまい。「真理よ!」と私は叫んだ、「真理に従って天が私を潰そうとも。虚偽はいやだ! 天的安楽国が背教の代価であるとも。)

このように、功利主義者や機械的損得哲学がこの世を支配し、純真な青年には万事不利な状況にあっても、義務の定かならぬ性質がまだ氏

にぼんやりと存在していた。この世に神なくして生きていたが、神の光は全く失せていなかったのである。

神は——愛する者をその手でしっかりと握っていて下さる。たとえ、に分は暗闇の中に放置され、絶望の中にあがいていても、神は常に愛の眼差しを以って光明へと導き下さる。氏は言う、「たとえ、まだ封印されている私の目が言うに言われぬ憧れを抱いても彼を見ることができなくとも、それでも私の心の中に彼はいまし、彼の天に書かれた法は変らず読め、神聖であったのだ、<sup>(11)</sup>」と。

彼の苦痛な思いは弱さの思いであった。弱いということはミルトンがサタンの口を通して語っているように、本当の惨さである。何が出るか、その力を見い出せない間は自ら弱く感じる。だから、まず目自見える形で自分の力を具現することから始めなければならない。おぼろげなさ迷う能力と定まった疑い得ない実行の間には何という違いがあることか！ 或る不確かな自己意識は我らの中に住む。それを明確に確定的に判別できるようにするのは彼らの仕事のみである。

彼はここで、実践の意義を見い出しつつある。実践はカーライルにとって象徴的意義を持つ。現実には象徴の世界である (natural super-natural の立場)。換言すれば、それは神の世界である。行為はこの象徴の世界の中で神の意志を代行することである。ここに後の生産の高揚への芽ばえがある。<sup>(12)</sup>

働きこそ精神がその天性の傾向を最初に見る、鏡であるのだ。かくトイフェルスドレック氏は考え、有名な「汝自身を知れ」という格言は不可能だ、それは部分的にも可能な

Know what thou canst work-at.<sup>(13)</sup>

(汝が働いて為し得るものを知れ)

に移し変えねばならない、とする。

頭の中ではこの事実が分かっているが、何故氏は悩むのか。未だ二五、六歳のトイフェルスドレック氏が為し得たものは何もない。二五歳と言え、ベートーベン

勇氣、からだがどんなに弱っていようと精神で打ち克つてみせよう。二十五歳、それは男たるすべてがきまる年だ。悔いを残してはならぬ。<sup>(14)</sup>

と言っている。働きの無い者がどうして自己に能力があると信じ得ようか。このように考えると、恐ろしい不信は自分自身への不信となる (“the fearful Unbelief is unbelief in yourself,” p. 102)。氏にとって宇宙は生命・目的・意志、又敵意すらも全く欠いていた。それは一つの巨大で死んだ無限の蒸気機関がその死の無情さで彼の手足をばらばらに砕こうとしていた。

O, the vast, gloomy, solitary Golgotha, and Mill of Death!<sup>(15)</sup>

(オウ、広大で小暗く孤独なゴルゴタよ、死の工場よ！)

心をむしばむこのような思いに悩めば、いかに氏の如く鉄のような体格を持っても人は病氣にかからざるを得ない。頭の中で絶望で死ぬことはどんなに美しいことであろうか！ しかし、それを行うことは全く別である。感情、知性の窓という窓が全部汚され、泥ではねかけられれば、純粹の光は魂に入ってくることは出来ない。外的・内的悲惨の中であって尚、彼はキリスト教の余光によって、自殺は妨げられていた。しかし、氏の心は天的の露に訪われず、硫黄とゆっくりと消費する火の中でくすぶっていた(『失樂園』四卷七三—八行参照)。物心がついてから涙を流したことのない氏は唯一回、涙を流した。それは彼がファウストの死の歌を半ば声を出して吟唱していた時である。その歌は次のようである、

“O selig der, dem er im Siegesglanze Die blut'gen Lorbeern  
um die Seläfe windet, . . .” — *Faust*, iv, 1572-6

(オウ、幸いなるかな、死が戦闘の栄光の中に見出し出す者は)

戦いの光栄の中に死ねる人は幸福である。しかし、自分にはこの最後の友(死)からも見離されている、運命それ自体私に死なないよう運命づけるはずはないと思った時、彼は泣いたのである。

希望がなくなれば、人への又は悪魔への恐れもなくなる。サタンが

現われて、彼に自分の心を打ち明けることが出来れば慰められるように思うことが度々であった。万物は高くは天の低くは地のものすべて私を傷つけるかのように思えた。恰も、天と地がむさぼり食う怪物の無限のあごにすぎず、私はその中でふるえ、食い尽されるのを待っているかのように思えた。

彼、二六歳の一八二一年六月二日、むし暑い土用の日、氏はネブカデネザールの炉のように熱い鋪道の上を、蒸し暑い空気の中を、汚ない市民のごみが積った『地獄の聖トーマス街』に沿って骨折って徘徊していると突然、次のような思いが心に起こってきた。(訳はこの部分に限り新渡戸稲三のものをを用いる。)

(when, all at once, there were a Thought in me, and I asked myself :) “What are thou afraid of? Wherefore like a coward, dost thou forever pip and whimper, and go cowering and trembling? Despicable biped! What is the sem-total of the worst that lies before thee? Death? Well, Death; and say the pangs of Tophet too, and all that the Devil and Man may will or can do against thee! Hast thou not a heart; canst thou not suffer whatsoever it be; and, as a Child of Freedom, though outcast, trample Tophet itself under thy feet, while it consumes thee? Let it come, then; I will meet it and defy it!”<sup>(2)</sup>)

(貴様は何が怖い。憶病な奴だ、何時までもこそこお慄えながら、

この世の中を逃げ隠れるようにして歩いて何だ。賤むべき奴だ。何だ、貴様が怖っていることは。何が怖いのだ。死？ 死ぬるが怖ろしい。よし仮に死が怖ろしいとする。それから後は地獄の苦難が怖ろしい。また鬼も人間も貴様に対して辛いことをする、またせんとすること、そんなことが怖ろしいといふのか！ 貴様には heart (勇氣) がないのか、如何なることでも耐える力はないのか。そして自由の男子 (a Child of Freedom) として、人に見捨てられても、地獄というものを貴様の足の下に踏みつけて、その足が焼け尽されるまでも、地獄 (Tophet) そのものを蹂躪するだけの勇氣はないのか？ よしどんなものでも来い、悪魔だろうが地獄だろうが、死だろうが来い。そんなものはもう恐れぬ、男らしく相対して打ち克とう！<sup>(18)</sup>

その時、氏の全身は火が燃えるように感じた、

And as I so thought, there rushed like a stream of fire over my whole soul, and I shook base Fear away from me forever.<sup>(19)</sup>

(そう思った時、全霊は火の流れのように勢いよく走った。<sup>(20)</sup> 私は卑しい恐れを私から永久に振り払ってしまった。)

この体験はカーライル自身としてはエディンバラのリース歩道 (Leith Walk) 上で起った。Hudson はこの件について述べる、

キリスト教と英米文学 (二)

... as to Teufelsdröckh in the Rue Saint-Thomas de l'Enfer in Paris, so to Carlyle in Leith Walk, Edinburgh, there had come a moment of sudden and marvellous illumination, a mystical crisis from which he had emerged a different man.<sup>(21)</sup>

この霊的体験は魂が自由を得る体験であった。肉に縛られていた魂が解放されて、神のものに触れたのである。ここに鬼糞氏は神とかキリスト、或いはパウロに言及していない。しかし、これは実質的に又実存的には、霊の解放である。鬼糞氏は続いて述べる、

I was strong of unknown strength; a spirit, almost a god. Ever from that time, the temper of my misery was changed: not Fear or whining Sorrow was it, but Indignation and grim fire-eyed Defiance.<sup>(22)</sup>

(私は今まで知らなかった力を得た。霊、ほとんど神々の力であった。その時以来、私の悲惨な気性は変化した。泣く悲しみでなく憤慨と頑強れ火の眼をした挑戦であった。)

鬼糞氏は高次元の精神に変ぼうした。然し、気付かれるのはこの霊的体験に罪の許しから来る救いの確証、平和、喜びが欠けていることである。かえって、憤怒と挑戦を感じている。「彼は苦痛の取り去られるのを期待するのではなく、苦痛と生活を共にして生きなければな



らぬ現実を認識した」とイアン・キャンベルが述べる如くこの体験は完全な宗教的回心ではない。工藤氏もこの精神的体験は厳密な意味における「転心」ではなかったとしてはいるもの、その理由とするところが誤っている。即ち氏は「彼がなんら新しい教義を受け入れたものでもなければ……かえって父祖伝来の古い信仰に帰り、意識以前の古い自己に合したのである」としている。カーライルはこの点、一度失った古の信仰に復帰していかない。確かにキャンベルはこの永遠の否定の体験の中にカーライルの父ジェームズの働く姿が投映されていると見る。憤怒と挑戦の効力は「明らかに遠くエクルフィカンの幼年期に、かれの家庭で育てられたものであった」と言う。注意すべきはキャンベルもカーライルが古い信仰に復帰したとは考えない。もし、彼が古い信仰に復帰すれば本当の信仰が与えられる。それが永遠の肯定の意味・実体である。この意味で工藤氏は二重の誤りを犯している。

先述の如く彼には確かに罪の許しという意識はない。この点彼はベラギウスの流れを汲むものではなからうか。ここに彼の回心の不完全さが指摘されるべきであろう。彼自身、南方の熱い血を持つアウグスチヌスと異って、特に人目につく罪を犯しておらず、悔いる必要がなかった。この点、キリストの贖罪が余り前面に出て来ないのも不思議ではない。しかし、これはカーライルの精神的全体から見ると、程度の問題であって「永遠の肯定」(Everlasting Yea)ではキャンベルは「サーターの中に記された霊的苦悶のこの第三段を生命のあふれるものにした力は、不安と疑惑と罪意識に悩まされた何年かを抜け出した歓喜から生まれたものである。それは猛烈な勉強と鍛練の末に闘い

とられたものである」と述べるように彼の罪の清めも失なわれていない。

彼のこの新生には後の妻となったジェイン・ウエルシュとの交流が同時進行していたことは注目すべきである。キャンベルはこれを次のように書いている、「彼の夜空に輝く唯一の明るい星は、いまやジェイン・ウエルシュであり、彼女とのますます深まりつつあった親交は「永遠の否定」の暗黒をすっかり払いのけてくれた」。

永遠の否定はかつて言った、「見よ、お前は親無しだ、捨てられている、世界はおれのもの(悪魔のもの)だ」。しかし、今の彼の全存在はこれに答えて言う、「おれは貴様のものでなく、自由であって永久に貴様を憎むのだ!」と。かくしてカーライルは霊的再生を遂げたのである。

この考えは後の彼の『英雄及び英雄崇拜』で次の如く繰返されるとアイアンは指摘する、「私の財布は奪うこともできよう、しかし、わたしの良心(moral self)を亡ぼすことはできない。弾丸をこめた拳銃を持って立ち向かう強盗なら、財布は彼のものだ、しかし自己(the self)は己のものだ。そしてわが造り主、神のものである。絶対お前のものにはならぬ。わたしは死んでも抵抗する。お前に対して反乱する。それを守るために、いかなる極刑にも、非難攻撃にも、混乱迷惑にも挑戦する」。まことにキリスト者の自由を現代的に表現したものと受け取られる。

この章を結論して次の如く述べる、

It is from this hour that I incline to date my Spiritual New-Birth, or Baphomitic Fire-baptism; perhaps I directly thereupon began to be a Man.<sup>(28)</sup>

(私が靈的新生、火の洗礼を記録したいのはこの時からである。恐らく私は直ぐにそこで人間になり始めたのであろう。)

このような靈的狀態に於いて始めてキリストの言われることが、ひしひしと実在感を以て理解され得るのである。これをたとえて言うならば、目からうろこが落ちたのである。イエスがニコデモに言われたように、カーライルは靈的に新しく生まれたのである。所謂、二度生まれの人となった<sup>(29)</sup>。新生児は暫く、眠り続ける。そのように、靈的に新しく生まれた氏も、暫く、世間的に眠る。それが次章に受け継がれるべき無関心である。しかし、新生児もやがて目を覚まし、大自然のサイクルにその生活を合わすように、靈的新生児も、社会に対して目を覚まし、永遠の肯定をするのである。新しい種が氏の靈に蒔かれた。これがいかに成長するか。それは今日カーライルの著作集となって結実している。後に触れる如く、著作は本作り屋の仕事ではなく、天的な魂を持った者が後世に残さんとした思想であるとカーライルは考えていた。

## (二) 無頓着の中心 (The Center of Indifference)

〔内容〕 トイフェルスドレックは今や外へと、非我に傾く。より健

キリスト教と英米文学(二)

全な食物を見付ける。古代の都市、その起源と成長の神秘。目に見えない伝統と所有物。真の書物の力と徳。ウァグラムの戦場、戦争。巡礼が見た偉大な場面、偉大な出来事、偉大な人物。ナポレオン、神の使徒、適材適所を説く。ノースケープでのトイフェルスドレック、自己防衛の現代的手段。火薬と決闘。巡礼は自分の惨さを軽蔑して、無頓着の中心に到達する。

... the fire-baptised soul, long so scathed and thunder-riven, here feels its own Freedom, which feeling is its Baphomitic Baptism: the citadel of its whole kingdom it has thus gained by assault, and will keep inexpiable; outwards from which the remaining dominions, not indeed without hard battling,<sup>(30)</sup> will doubtless by degrees be conquered and pacificated.

(火の洗礼を受けた靈は、長い間かくも傷つけられて雷に裂かれていたが、ここでそれ自身の「自由」を感じる、その感情はその火の洗礼である。それは靈がかくして攻撃によって獲得し、攻略されるのを防ぐであろう靈の王国全体のとりでであり、残りの領域が、本当に激しい戦いによって始めて、確かに除々に征服され、鎮定されるであろう外界である。)

魂が長い激しい戦いを戦って始めて火の洗礼を与えられた。その戦いは人によって異なるであろうけれども到達する真理は同一であると

思う。窮極的にはイエスが山上で説かれた、幸いなるかな……で始まる天国に住む者の律法に到る。<sup>(33)</sup>

カーライルの火の洗礼もここに到る一つの重要な過程であった。<sup>(34)</sup>彼のこの霊体験は未だ完全なものではなかった。「あの古い内的悪魔派は未だ戸外に投げ出されていなかった」(“the old inward Satanic School was not yet thrown out of doors”)<sup>(35)</sup>けれども、それを捨てるべき断固とした司法士の警告を受けたのである(“it received peremptory judicial notice to quit.”)<sup>(36)</sup>

トイフェルスドレックは全く幽霊としてその時、世の中をあばれ回ったのではない、悪くとも、幽霊と戦う人間として、否いつかは幽霊を鎮定する者としてであった。たとえ心落ち着きなく多くの「聖人の泉」へ巡礼し、その渴きをいやすことがなくとも、彼はそれにもかかわらず、時々慰謝が与えられる小さな世俗的泉を見出す。即ち、彼は「自分自身の心を食べる」のを中止し、より健全な食物を求めて、外の「非我」をつかもうとする。彼は世界を旅行して回る。

世界を旅行して回った結果、彼は過去の目に見えて触れることが出来る産物を三つの範囲に分けて考えるようになった。その三つとは政府や兵器庫を持つ都会、耕作された畑、そして三番目に書物である。

まず、本であるが、これは最後に発明されたがその価値は他の二つよりはるかに大きい。真の書物の価値は奇跡的である。年毎にくずれていき、年毎に修理を必要とする石造りの死んだ都会には似ていない。むしろ、耕作された畑に似ている、しかし、それは精神的な畑である。

本を書くことが出来る人は本当の征服者であり勝利者である。それは人間ではなく悪魔を相手にするからである。彼は大理石や金属より長持ちし、奇跡をもたらす精神の都会となるものを建設したのである。世界の古都を巡り歩くことは愚かではなからうか。ヘブライ語の聖書、又はルーテル訳の聖書を読んだ方がもっとよい。このように氏は書いている。

次に、彼は戦場を訪れ、戦争を論じる。戦争のために芝ふは裂かれ、踏みつけられる。人間がその世話を好む、果樹、生垣の並び、快適な住処は火薬で吹き飛ばされる。そして、従順な種を植えてある畑は荒廃して恐ろしい頭蓋骨の場所となる。それでも、大自然は働いている。火薬の小悪魔はその最大の悪行で以っても自然に逆らわせないであろう。あのすべての血と屍は覆われ肥料へと吸収されるであらう。翌年になるとマーチフィールド大平原は緑色、否、もっと緑色になるであらう。繁茂する疲れない大自然は常に人間の大きな浪費から自らの利益はほとんど引き出さないのに、殺人者のその死体から生きる者に生命をもたらしうことか！カーライルは大自然の大きな回復力に驚嘆している。

世界各地をながめている間にトイフェルスドレック氏は悲しみから目をそらすことができた。彼の中の悪魔派(バイロン派)は部分的に押えられた。彼はしかしまだ旅を続ける。コンスタンチノーブル、サマルカンド、ヴェークルース、タドモル、バビロン、中国、北極、などを訪れる。この頃には彼の心の中の悪魔派は十分に追い出された。

彼は宇宙に目を向ける。

Ach God, when I gazed into these Stars, have they not  
looked-down on me as if with pity, from their serene spaces;  
like Eyes glistening with heavenly tears over the little lot of  
man!<sup>(35)</sup>

(あ、神よ、私がこれらの星を眺める時、それらはまるで憐みを  
以ってその透明な場から私を見降ろさなかったでしょうか、人間  
の小さなために天の涙で輝く目のように！)

今まで自分の悲しみにだけしか目が向かなかった氏が火の洗礼を受け、  
非我の外界を目を移す、段々と彼の内的な悪魔派は消え去る。更に彼  
は宇宙の広さにまで目をやる。心が捕われなくなるにつれて彼の認識  
の世界は広がる。宇宙に輝く星を見ると、人間の定めが哀れに思えて  
くる。星までがそれを憐れんで泣いているように思える。

Thousands of human generations, all as noisy as our own,  
have been swallowed-up of Time, and there remains no wreck  
of them any more;<sup>(36)</sup>

人類のはかなさ、何千世代と続く人類も時の中に飲み込まれ、一人も  
居なくなる。切々たる無常感が漂う。人類は全部亡んでも、アークタ  
ラス、オリオン、シリウス、プレアデイスは相変らず輝いている。

Pshaw! what is this paltry little Dog-cage of an Earth; what  
art thou that sittest whining there? Thou art still Nothing,  
Nobody: true; but who, then, is Something, Somebody? For  
thee the Family of Man has no use; it rejects thee; thou art  
wholly as a dissevered limb: so be it; perhaps it is better  
so!<sup>(37)</sup>

(何だ！ この取るにたらない地球という小さい大小屋は何だ？  
そこで座って泣き事を言っている貴様は何だ？ 貴様はまだ無価  
値だ、取るに足らぬ者だ。本当に。しかし、それならば誰が価値  
があるものか、一角の人物か？ 貴様には人類という家族は役に  
立たない。それは貴様を拒絶する。貴様は全く切り離された手足  
のようだ。そうであれ。恐らくそのほうがよいであろう。)

ここに精神的静けさはあるが締めめの悲しさ、個人の無価値の考えが  
ある。一八二二年から一八二五年のカーライルの道徳的生活の氣質が  
ここに表われている。この間に彼は長く潜在していたエネルギの回  
復を感じることが出来、様々な仕事、活動に従事して、ロンドンやパ  
リを訪れ、名士に会い、歴史上の大事件にも立ち会った。精神は豊か  
になっていくのは感じたが、心の中にひそむメランコリはどうしよう  
もなかった、と L. カザミヤンは述べている。氏はこの世の無価値を  
身を以って体験している。この世では誰も価値ある者はいない。勿論、

これは大宇宙の規模から考えてのことである。カーライルはそこまで考えなくては人生問題の解決を得ない。このように考えて、今まで重く感じていた重荷が軽くなり、これを投げ捨て、第二の青春を迎えて自由に飛び跳るであろう。かかる過渡期、否定の極から肯定の極に旅をする段階が「無頓着の中心」である。

キャンベルは「永遠の否定」から「無関心の中心」を経て、カーライルが「合金のような新しい宗教的確信<sup>(4)</sup>」を得たと述べている。勿論、これは彼の人生を貫く、揺ぐことのないキリスト教的信仰であることは言うまでもない。

〔付記〕参考文献は後篇に記載する。

注

- (1) Thomas Carlyle, *Sartor Resartus, On Heroes and Hero Worship* (Dent; London, 1973), p. 121. 以下の引用はこの版による。これを *Works* と略す。但し「内容」の部分は研究社小英文学叢書(昭和三九年)による。
- (2) 工藤好美 Carlyle (研究社、昭和五五年復刻版)、一三二頁。
- (3) *Wosler*, p. 122.
- (4) イアン・キャンベル著 多田貞三訳『トマス・カーライル』(成美堂、昭和五六年)、二五頁。
- (5) 同、二七頁。
- (6) たとえばヒミリア・ディキンソンは  
To lose one's faith surpasses  
The loss of an estate  
Because estates can be  
Replenished, — faith cannot.

と歌う。尚、右の詩について拙論「キリスト教と英米文学」『人文学論集』(仏教大学学会、昭和五六年)、四四頁参照。

- (7) *Works*, p. 122.
- (8) 工藤好美、前掲書、五九一六〇頁。
- (9) *Works*, p. 123.
- (10) *Ibid.*, p. 124.
- (11) *Ibid.*, p. 124.
- (12) 工藤好美、前掲書、一三三—一三五頁。
- (13) *Works*, p. 124.
- (14) ベートーヴェン・小松雄一郎訳『音楽ノート』(岩波文庫)、八頁。
- (15) *Works*, p. 125.
- (16) *Ibid.*, p. 126.
- (17) *Ibid.*, p. 127.
- (18) 新渡戸稲三全集第九卷(教文館、昭和四四年)、一三七頁。
- (19) *Works*, p. 127.
- (20) “there rushed like stream of fire over my whole soul” の訳が困難である。主語は“my whole soul” 述語は“rushed” である。“私の全霊が走った、火の流れのように”という意味が正確であると思う。この点、新渡戸訳は「私の心に火(stream of fire)が燃え立つように思えた」としている(一三七頁)。これは内容を正しく把握して意識している。矢内原訳は「私の魂に火の流れがさっと閃きんだ」(矢内原忠雄『土曜学校講義四』(みすず書房、一九七二)、込二一九頁)は明らかに文法上の誤解である。火の流れが主語でない。“over my whole” を一まとめにして「over」は“rush over”の方にまよめるべきである。
- (21) *Works*, pp. vii-viii. 石田憲次『二度生まれ』(アポロン社、一九八一年)、一七一頁参照。
- (22) *Works*, p. 127.
- (23) イアン・キャンベル、前掲書、四八頁。

- (24) 工藤好美、前掲書、二六頁。
- (25) 同、二六頁。
- (26) イヤン・キャンベル、前掲書、四九頁。
- (27) 同、五八頁。
- (28) 同、四九―五〇頁。
- (29) 同、一九六―一九七頁。
- (30) *Works*, p. 128.
- (31) 石田憲次、前掲書がこの方面の意識を扱っている。
- (32) *Works*, p. 128.
- (33) マタイ五の三―十二参照。
- (34) 矢内原忠雄はこれを「救いの前夜」と言っている(前掲書、二二九頁)。
- (35) *Works*, p. 128.
- (36) *Ditto*.
- (37) *Works*, pp. 137-138.
- (38) *Ibid.*, p. 138.
- (39) *Ditto*.
- (40) Louis Cazamian, *Carlyle* translated by E. K. Brown (Archon Books, 1966), p. 116.
- (41) イヤン・キャンベル、前掲書、三二頁。